

2010 年度春学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	教育文化	学科
担当科目	ファーストイヤーセミナー		

<春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

私は、チューター業務として、おもに出席票の配布・回収や受講生たちに対する学習の助言等を行った。初年次教育の講義なので、受講生のほとんどが1年次生で、編入生が少数名いる程度であった。私が3年前に受けた初年次教育の講義では、院生がTAとしてついていたので、学部生がチューターをするイメージが全く湧かなかったというのが本音である。したがって、チューター業務も、初めは院生の先輩や違うクラスの同期のチューターの様子を見ながら手探りでやっていた。時には戸惑うこともあったが、それよりも得られることのほうが多かった。

チューターをして得たものとして、大きく分けて3つのことがあげられる。まず1つ目に、後輩たちの成長を近くで見ることができたことである。大学についてよくわからなかった学生たちが、講義の中で図書館の利用方法やレポートの書き方を学び、発表するまでの過程を見て、日々成長していく姿に私は喜びを感じていた。2つ目に、学生たちとともに、私自身も学ぶことができたことである。学生と自分を照らし合わせることで、自分自身を振り返ったり、新たに発見するものが増えたりして、考えを深めることができた。3つ目は、教授の先生方や院生の先輩方との交流が、以前よりも増えたことである。それは、オリエンテーション合宿への参加したことが大きく影響している。合宿では、教授の先生方や院生の先輩方と行動することが多かったため、それまで話す機会のなかった方とお話しできたり、講義では聞けないようなお話を聞けたりできた。合宿が良いきっかけとなり、その後の交流の幅が広がった。

<今後のチューターまたは先生への提案>

チューター業務を振り返り、担当の教授や院生の先輩、同じチューター仲間との情報交換はとても重要だと感じた。私自身あまり自信がなかったこともあるが、こまめに情報交換をしていたことで、講義ややるべきことが円滑に進められたからである。これからチューターを始める方も、教授や講義によるかもしれないが、情報交換などをして情報を集めながらチューター業務に取り組んでほしい。必ず役に立つはずである。

2010 年度春学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	教育文化	学科
担当科目	ファーストイヤーセミナー		

<春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

ファーストイヤーセミナーという初年次教育科目のチューターだったので、大学に入ってきたばかりの1年生を相手に、先輩として良い手本となるように心がけたつもりです。それが一番の仕事であり、重荷でもありました。具体的な仕事内容としては、出席表の配布・回収やプリント配布、グループワーク時のアドバイス・コメントが主でした。特に、グループワーク時のアドバイス・コメントについては、各グループが発表に向けた話し合いをしているところへ参加して的確なアドバイスを施すのが大変でしたが、先生やTAさんのようにはできないことをよくよく実感して、私にできる範囲で少しでもグループ活動の力添えとなるよう努めました。

また、授業を受ける側とは違った視点から授業を見ることができるので、学生の授業中の態度や課題に取り組む姿勢などについて注意を払うようにしたのですが、初めの頃は少なかった遅刻・欠席者が、回を追うごとに微増していくのが気になりました。そうした出席管理に関して学生の自己管理であることは間違いないのですが、大学生活に不慣れな時期のファーストイヤーセミナーにおいては、学生と距離の近い立場にあるチューターが注意を促すよう少し配慮することも必要ではないかと思います。

今回チューターをすることが、これまでの自分自身の学習や研究に対する態度を見直し、新たにやる気を起こす契機となりました。というのも、授業での先生のご指導を身にしみて感じたり、授業の合間などに先生や院生のTAさんとそれぞれの研究についてお聞きする機会があったりして、刺激を受けたからです。しかし一番は、授業を受ける学生たちを見て、自分も頑張らねばという思いにさせられたことがあったように感じます。卒業論文を前にして行き詰まり・中だるみのような時期にあった私には、本当に良い経験でした。

チューターをしてみないかという話を聞いてから、その日のうちに話がまとまり、なんだかわからない不安を抱えたままにやってみるようになったチューター業務でしたが、得るものは大きかったと思います。今後の自分に何かしら役に立つことと信じています。

<今後のチューターまたは先生への提案>

先にも少し触れましたが、まだ大学生活に不慣れな1年生を対象とするファーストイヤーセミナーでは、距離の近いチューターが先輩として、授業に関することだけでなく、大学生活全般についてもアドバイスや注意を積極的に行っていくといいのではないのでしょうか。私自身、入学したての頃は何かとわからないことも多く、かといって自分から誰かに相談をすることもできずにいたので、このような授業に親切に気にかけてくれる先輩がいれば、大学生活への不安が軽減されることと思います。

2010 年度春学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	教育文化	学科
担当科目	教育文化学科 FYS (宮坂朋幸先生クラス)・異文化間心理教育論 (井上智義先生)		

<春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

《教育文化学科 FYS》

●仕事内容

- ・ TA の補助 (プリント類の配布・出席の確認・1 回生が提出した小レポートの添削作業等)
- ・ 1 回生同士のグループワーク時にレジユメの作り方やグループ発表の準備に関してアドバイスすること
- ・ 1 回生のグループ発表に対する意見・感想・アドバイスなどのコメントをすること

●気づいたこと・感想

まず驚いたことは、私たちが 1 回生時に受講していた FYS よりもはるかに授業内容が体制化され、高度になっていることでした。4 回生の立場から、1 回生にアドバイスをする機会が幾度もありましたが、私が 1 回生の春学期終了時に今年の 1 回生がこなした作業ができるレベルに達していたかと言うと、正直自信がありません。それほどに FYS の質が良くなっているという印象を受けました。

また、1 回生最初の演習の授業にしてはグループ発表・レジユメ作成・レポート提出など準備の必要な作業が多かったように思いますが、比較的きちんと準備されていて、努力の跡がよくうかがえました。特に、授業回数を重ねるごとにレジユメやレポートの作成が上達していくのがよくわかりました。少しだけ残念だったのは、グループ発表時の質疑応答の時間に先生があてるとききちんとまとまった意見や感想を言えるのに、自分からはコメントを発表する学生がいなかったことです。

《異文化間心理教育論》

●仕事内容

- ・ TA の補助 (プリント類の配布等)

●気づいたこと・感想

6 講時の遅い時間帯の割には受講人数も比較的多く、また受講している学生が真面目で私語もほとんどありませんでした。毎回先生の講義だけでなく、院生やゲストスピーカーの講演などの回もあり、学生にとっては興味深い講義内容だったのではないかと思います。

<今後のチューターまたは先生への提案>

1 回生の FYS チューターをされる方には、1 回生と積極的に会話することをお勧めします。私は 1 回生同士のグループワークの時間に話し合いの輪に加わるついでに、勉強やサークルなどについて聞いて回りました。授業中 (グループワーク中) に私語ばかりはもちろんいけません、ほどほどに話すことで、1 回生がこちらに何か質問があるときに質問しやすい環境が作れると思います。

また、チューターのシステム入力に関してですが、先生とチューターだけでなく、授業の受講生も見られるようにはできないのでしょうか。システム入力はみんなで共有できてこそより価値があるものになると思います。